

近年、社会（企業）が求める人材は「自ら考えて、行動できる人」である、といった趣旨の話をよく耳にします。“求めている”ということは“不足している”ということなのでしょう。ですが、「自ら考えて、行動できる人」が昨今急に必要になった、とは思えません。そんな人は昔から、いつの時代も変わらず必要だったと思うのです。ということは、そういった人材が近年は減ってきているということでしょうか。だとすればなぜなのでしょう。私が思う理由はいくつかあるのですが、今回は保護者の皆様方と共有したいものに絞って話をさせていただきます。

右の資料は、文部科学省が隔年で行っている「子供の学習費調査」の令和3年度の結果です。私立・公立中学・高校に子供を通学させている保護者が、子供一人当たり支出した年間経費について、平成22年度から令和3年度までの推移が載っています。例えば公立高校に通う子供一人に親は年間51万3千円を支出していて、その内訳は、学校教育費30万9千円（授業料・修学旅行費・学用品・クラブ活動費・通学費など）、学校外活動費が20万4千円（通塾・習い事など）という具合です。少子化にも関わらず、公立・私立・中学・高校問わず学習費の増額が見られます。

時代の変化が激しい・速いと言われる社会で、どんな社会でも通用するためには「勉強ができること」や「一芸に秀でていること」が必要だと考え、早期教育を与える親が増えているのだと思います。

子供には親が思う最良の方法と方向性を示してやることで、できる限りの（あるいは本人の力以上の）結果を与えてやる。そんな子育ての形が増えているのではないかと思います。

しかしそうやって育った子供は、目標や目的、成功体験は親や講師・コーチなどの他者から与えてもらうものだ、という感覚が染みついてしまうのではないのでしょうか。結果、社会が求める「自分で考えて、行動できる人」にはなりません。子供たちは一人一人が、一個一個の別人格です。保護者の皆様とも、もちろん我々教員とも違う人格です。彼らにとっての幸せは、自分で見つけて自分でつかんでほしいと思うのです。そのためには試行錯誤が必要でしょうし、そうすると時間がかかります。いつ幸せをつかめるかもわかりません。ですが、そこに寄り添い、失敗も含めて見守ることが人を育てるためには必要なことだと思います。本校の3年間では子供たちが自分で意思決定をし、思う存分試行錯誤し、人生の糧を得てくれることを願っています。

